

ロレンス・ファウルズ・自然

——エコロジーの観点から二人のイギリス人作家を読む

有 為 楠 泉

This paper analyses the ways of describing nature by two English writers, D.H. Lawrence and John Fowles. The analysis will be done from the viewpoint of ecology. This viewpoint is essential in considering how those writers faced the endangered nature on the earth. Each of them was a forerunner in his time to warn against it, using it as the main theme of their works. Both emphasized the importance of catching vital force which is latent in nature. Furthermore, this paper verifies that both writers were critical of the traditional English landscape gardens as an opposition to real nature. Finally, an assumption will be confirmed that Pan may still be found in the present time so long as people realize the nature of nature.

I. はじめに

21世紀の地球上に住むわれわれは、前世紀から引き続いて起こりつつある自然環境の変化が、予想の度合いをはるかに超えた破壊に繋がらうという脅威を、今や現実味を帯びたものとして知っている。しかしながら、人間はつねに後手にまわってきた。人間による自然破壊について、その兆しを敏感に捉え、それに警鐘を鳴らす行為は、これまでも常にあったにもかかわらず。文学においてもそういう先駆的な言動は存在する。否、むしろ、文学においてこそ、極めて先鋭に展開されることは少なくない。そして、往々にして、同時代の読者に十分な認知を得られないことも事実なのである。

D. H. ロレンス(D. H. Lawrence, 1885-1930)は、20世紀初頭のイギリスで、機械文明と産業の躍進が自然を破壊しつつあることに、いち早く批判の矛先

を向け、自然が人間に対して持つ意味を明確にしようとした作家である。ロレンスの作品には、自然や生きものの描写が夥しく見出される。そして、これらの描写は、常に、人間と自然との関係の中で捉えられている。ロレンスはイギリスからドイツ、イタリア、セイロン、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ合衆国、メキシコ、と世界を旅し、それらの土地の人々と自然の関わりの中に、自然の意味を見出そうとした。

他方、ジョン・ファウルズ (John Fowles, 1926-2005) は、20世紀後半、世界中のそこそこで、自然のいびつな変調が見かけられるようになったことに対して、早々に人々の注意を促すエッセイを発表し、同時に、その特有な自然空間の設定を小説の中に展開していった作家である。ファウルズは、イギリス南西部の海に面した場所に、自ら広大な土地を保有して、野生の森を体感する暮らしをしたことも知られている。

ロレンスとファウルズという二人のイギリス人作家の、自然との関わりかたには、それぞれ、固有の要素がある。しかしながら、自然をめぐる人類の仕業とそれが引き起こした禍^{わざ}の痕を、エッセイや小説という文学のジャンルを介して明白にし、人々の関心を促す先鋒であったという点において、二人の作家には時間を越えた共通性が存在する。

以下、本論は、ロレンスとファウルズという二人のイギリス人作家の、自然をめぐる言説と描写をもとにして、二人の自然観について、エコロジーの観点から考察を試みる。その中で筆者は、ロレンスからファウルズに引き継がれる一つのエコロジカルな自然観の系譜が存在することを明らかにする。さらに、その系譜は、イギリスに伝統的に存在した庭園文化、なかでも、自然の借景を取り入れた雄大な空間的広がり、と、ロマン主義的精神を擁した庭園文化の極致でもあったイギリス式風景庭園を批判するものであったことを明白にする。

Ⅱ. 自然に託される再生と治癒

(1) ロレンスと自然

ロレンスは、自然の風景やさまざまな動植物について夥しい描写を残している。そして、その特徴は、自然にまつわる印象的な描写が、常に、人間との関わりを介して行われていることである。小説『白孔雀』(*The White*

Peacock, 1911) で、シリアル (Cyril) の目に青春の不安と喜びを映させるネザーミアの森の木々、小説『虹』 (*The Rainbow*, 1915) で、アーシュラ (Ursula) をスクレブンスキー (Skrebensky) から切り離し、彼女に完全な個私の確立を自覚させることになる月明かりの丘、小説『恋する女たち』 (*Women in Love*, 1920) で、ジェラルド (Gerald) を死に至らしめる真っ白な雪山、小説『ミスター・ヌーン』 (*Mr Noon*, 1984) の中で、徒歩でアルプスを越えて南に向かうヌーン (Noon) とジョハンナ (Johanna) の足元に突如として光輝きながら舞い踊る蛍の群れ、そして、詩やエッセイに登場する美しい蛇も、兎も、ヤマアラシも、その他さまざまな動植物、さらには、山も、海も、島も、湖も、つまり、自然界に存在するあらゆるものが、それと出会った人間たちとの関わりや影響関係を通して、描写され、意味づけがなされるのである。

しかし、ロレンスは、人間との関わりがほとんど皆無のまま進展する自然描写も残している。たとえば、「小鳥たちのさえずり」 ("Whistling of Birds", 1919) と題したエッセイで、ロレンスは、小鳥たちを霜で痛めつけ、あまりに残酷な仕打ちを施す冬が、一夜にして恵みの春に変わり、鳥のさえずりが聞こえ始めるイギリスの気候の激変の様子を、余すところなく描写している。

その様子は silver という語が幾通りにもくり返されることによって、輝きを一層帯びる。たとえば a silver realm (4), silver potentiality (4), silver whistling (4), silver vivid bugles (4), silver fecund creation (4), silver fountain (5), silver plasm of pure creativity (5), a fountain of silver blissfulness (5) などである。そして、それらの語のくり返される中から明白に主張されているのは、そういう瞬間にこそ、本当の、自然な、創造の力が存在し、人間にとっても自己の内外の新生が可能になるという考えである。

長い長い冬、そして霜が昨日解けたばかりだ。それなのに、もう思い出すこともできない。不思議なほど遠くて、離れたところにある闇のようだ。夜中の夢のように現実感がない。今日こそが真実の朝であり、僕たちが自分自身となる時だ。自然で、ほんものなのだ。僕たちの内にも周りにも新しい創造の光がちらちらともっている。(中略) 僕たちの存在とは、これまでいっただってそうだったのだが、この純粋な創造性というすばやく動き回る愛らしい銀色のプラズマなのだ。 ("Whistling of Birds", 5)

ロレンスは、エッセイ「花のトスカナ」("Flowery Tuscany", 1927)においても、地中海地方の花々が春になって次々と溢れるように咲き誇る様子を、その博識な植物学的観察も含めて、見事に描き出した。日光が輝き、花があふれるイタリアの春に、悲劇は入り込む余地がないと述べる(58)。これらのエッセイにおける自然の描写には、自然界に備わっている新生、創造、再生の力への強い信頼が込められていると言ってよいだろう。

また、自然の持つ再生の力は、生きものの傷を癒す力にもなりうる。自然に直接接することによって、人間は心身ともに癒される。ロレンスはそう考えて次のようなエピソードを小説の中に作り上げた。『恋する女たち』の中で、視学官のパーキン(Birkin)は、彼の以前の恋人であるハーマイオニー(Hermione)に、瑠璃の玉の文鎮で、背後から思い切り頭をたたかれる。彼は、意識が薄れそうになる中、邸の外へ逃れ出る。丘陵のなかにどンドン踏み入り、谷に臨む山腹をさ迷い歩く。榛の木の茂みや花々の中を徘徊するうちに、パーキンははっきりと自己の意識と活力を取り戻す。有名な自然との交歓の場面である。

パーキンはなにかを求めていた。灌木や花がいったいの、ほの暗い、湿った丘の中腹にいて、彼は幸せだった。草木の一本一本に触れ、その触覚を通して自分を生氣で満たしたいと思った。パーキンは服を脱ぐと、裸のまま桜草の上に腰をおろし、肘を支えにして足を、腿を、膝を、腕をそっと動かしてみた。うつ伏せになり、腹や胸を草に触れさせた。冷たく快い微妙な触覚が全身を蘇らせるようだった。

(中略)彼はまた、足に縦の小枝を突きあてたり、肩に榛の木の鞭を軽くあてたり、銀色の樺の幹を胸に抱きしめて、その肌の滑らかさや硬さを、あるいはその瘤や節の生氣を感じ取った。これはいい。これは全てにおいて本当にいい。とても満たされる。他のものは何であれ、こうはできない。こんなに人の心を満たすのは、この、人間の血の中に忍び込む植物の冷たさと精妙さを除いて他にはない。(Women in Love, 107)

現代では、森林浴などの流行にも見られるように、自然や植物が癒しの力を持つという発想は、特別な考えではなくなったが、この小説が書かれた1910年代にはごく新しい考えであった。

(2) ファウルズと自然

一方、ファウルズの時代はどうか。20世紀初頭のロレンスの時代には、人はまだ春の到来が新生をもたらすことを信じることができた。第二次世界大戦中ですら、毒ガスに痛めつけられたロンドンの町でも、春にはすべてが一斉に再生する様子が見られたとジョージ・オーウェルは書いている⁽¹⁾。しかし、時が過ぎ、科学技術の進歩が、害虫の弊害を農業によって制圧できると安易に判断し、実行し始めた時、春になっても鳥はさえざることをしなくなった。1962年、アメリカでレイチェル・カーソン (Rachel Carson) が『沈黙の春』(*Silent Spring*) を世に出した時、その事柄の持つ意味は人々に重くのしかかってきた。

ファウルズは、それから3年後の1965年に、エッセイ「ヨーロッパの野生、その終焉の歌」("Swan Song of the European Wild") を発表し、均衡の欠けた北欧のエコロジーについて提言を試みた。また、「雑草・虫・アメリカ人」("Weeds, Bugs, Americans" 1970) では、殺虫剤を撒いて草を枯らすことをやめるように訴えた。「目隠しされた目」("The Blinded Eye" 1971) でも、種の減少を阻止して、残る自然といかに付き合うのかを論じるなど、破壊されつつある自然に対する人々の関心を積極的に促そうとした。これらは1970年代に環境保護運動が世界的な広がりを見せる状況に先立つものであったという点において、ファウルズの先駆性を垣間見せるものである。

しかし、こういったエコクリティシズム活動の要素をストレートに表現するものよりも、ファウルズの五官を通しての自然体験が一層明白に読み取れるのは、「樹木」("The Tree" 1979) と題した自伝的エッセイである。その中でファウルズは、自然の森への深い愛着を述べると同時に、森という複雑な有機体の中に、あらゆる経験が潜んでいることを指摘している。

わたしは、自分が森に対して、もっとずっと強い愛着を抱いていることを告白せねばならない。森がそのままに保たれるときに作り出す、複雑な内部の風景に対してである。群生の有機体、あるいは緑の珊瑚のような森の中には、わたしにとって、経験、冒険、美的快感、真理とすら言えると思うような、つまり、あらゆるものが、木々の枝葉から成る天蓋と外壁を越え、個人という枠をこえたところに、潜んでいるのだ。("The Tree", 29-30)

ロレンスが『恋する女たち』の中でバーキンに体験させたように、ファウルズも、自然の中、特に群生する植物の中で、人間が生を実感し、充足感を得る喜びを強調していると考えられる。

さらに、ファウルズは、その体験を、過去から現在にいたるまで人々の心の奥に抱き続けている野生への憧れと結びつける。そして、それが、歴史的に、民話、信仰、祭など人々の暮らしの中で、さまざまなバリエーションを示しながら登場してきたグリーンマンの伝承とも関連していると、彼は考える。

自然の本質、つまり、その現在性、見かけ上の流動性、創造的発酵作用、潜在的な力、というようなものの中には、われわれの心に潜む野生、あるいはグリーンマン、と非常に密接に結びついたあるものが存在している。そして、それを惰性的な過去のものと考えたり、単に分類可能な「もの」とか「その時浮かんだイメージ」として扱うや否や、それは見えなくなってしまうのである。("The Tree", 55)

グリーンマンは、もともとは異教的で、ローマの芸術にまで遡ると言われるが、イギリスでは既に4～5世紀頃に教会のシンボリズムに吸収されたとされている⁽²⁾。樹木の霊、死と再生の象徴としていろいろなフィギュアや人物像とも重ねられてきた。花輪や葉っぱのレリーフ、メイ・ポール、ロビン・フッド、五月祭の王や女王、緑の騎士、森番、などとして、教会の飾りや祭、民話や伝承にくりかえして登場し、人々の心の中に生きてきたのである。つまり、ファウルズは、人間がこのように、常に、自然の力を感知し、自然の一部として存在する暮らしを辿ってきたと述べる。が、同時に、人間が容易にその特質を見失う状況にあることに警告を発してもいるのである。

ちなみに、ロレンスの場合も、このグリーンマンは、しばしば作品の重要な鍵となった。ロレンスの生地イーストウッドは、ロビン・フッドが住んでいたとされるシャーウッドの森からすぐ近くの所にある。ロレンスの二つの小説、『白孔雀』と『チャタレー卿夫人の恋人』、において、ともに森番が生を象徴する重要な役割を担うのも、もちろん、このグリーンマン伝説と無関係ではありえない。

Ⅲ. 自然を保護することの意味

自然には再生と治癒の力が存在する。生きものは自らその力を持つと同時に、周囲の自然の力と呼応しつつ存在する。このような考えが、ロレンスにもファウルズにも共通するものであることを、前章で見てきた。それでは、徐々に進行する自然への侵食や破壊という事柄に関して、二人が提起した事柄はどのような意味を有したのかを、次に考察する。

自然の森の破壊とその保護について、ロレンスは、次のような場面を、小説『チャタレー卿夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*, 1928)の中で描写している。主人公コニー (Connie) の夫であり、准男爵のチャタレー家当主・クリフォード (Sir Clifford) が所有する大邸宅とそれに続く所有地の森は、かつてロビン・フッドが狩をした、あの大森林の生き残りの一部である。炭鉱経営者でもある先代の父チャタレー卿が、第一次大戦中にこの森から塹壕用木材を伐採して供出したので、今では馬道に面したなだらかな丘も丸坊主になっている。オークの木が立っていた頂は、今や剥き出しのまま、その先の新しい工場地帯が見渡せる。クリフォードは自ら戦争を経験し、下半身不随となって帰還した身であり、戦争の真実を見てきているが、丸裸になったこの丘を見ると初めて本当の怒りが湧き起こってきて、そこに植林させる。頂から見下ろした森は、中世のままの趣を留めていて、クリフォードはコニーに向かって言う。

「ほくはこれがイングランドの真の中心だと思う」(中略)

「これが古きイングランドだ。その中心だ。ほくはこれを無傷の状態を守ってみせる。」(*Lady Chatterley's Lover*, 42)

その森は今でも「古い野生のイングランドの神秘」(43)を残しているが、戦時の伐採によって打撃を受けていた。クリフォードはさらに続けて言う。

「...われわれが保存してきたのだ。われわれがいなければ、なくなってしまう.....この大森林の残りの部分と同じように、なくなっているだろう。古きイングランドのいくらかを保存する義務がある！」(中略)

「...もし、古きイングランドのいくらかが保存されなかったら、イングランドはすっかり消えてしまうだろう。こういう資産の保有者で思い入れを

持っているわれわれが、ぜひとも保存しなくてはならないのだ。」 (*Lady Chatterley's Lover*, 43)

クリフォードのこの自然擁護の声は[、]一見、高貴なものの義務の伝統さえ漂^{ノーブレス・オブリージ}わせる真つ当なものに映る。しかし、コニーの疑念を含んだ態度を通じて、作者ロレンスはクリフォードの考えに疑義を表わしていると考えられる。なぜなら、クリフォードのこの発言の根底には、森を領地の一部とし、それを維持することへの強い執着が先ず存在するからである。実際、その領地を継承する跡継ぎを最早永遠に作れないことこそ、戦傷で体に麻痺を負ったクリフォードの最大の悩みなのである。そして、また、イギリスという国自体が、世界を股にかけて、大英帝国として飛躍的な拡大をしていった時、造船の材料となってそれを支えていたのは、各地の地主たちによって森から切り出されたオークの木々だった。

チャタレー家の領地には、ラグビー邸と呼ばれる館と周囲の庭 (garden) を中心に、そこから続いて美しい「メランコリックな」大庭園 (park) が広がり、さらにそれに隣接して、森が控えている。大庭園と森はゲートで仕切られているが、ゲートから森に入って、くねった細い道を少し進めば、泉に下りていくことができる。森の中には、その「内面性」(64) と、「もの言わぬ古木の寡黙さ」(64) があつたし、樹々は「沈黙の力そのもの」(64) でありながら、まさに「生きた存在」(64) だった。ただし、森の反対側から先は炭鉱として土地がずたずたにされており、常に煤煙が立ち込め、そのあたりから森に入ってくる密猟者もあとを絶たない。

つまり、この邸と庭園と森は、周囲と際立った対照を示す一つの囲い込まれた巨大空間であり、全体としての纏まりを形成して、それ自体が巨大な自然風風景庭園を構成しているようでもある。イギリスには伝統的に庭の文化が存在し、何世紀にも亘って受け継がれてきた。とりわけ、18世紀に成立した英国式庭園は、自然そのものを庭園の根幹にすえた自然風風景庭園であり、それまでの大陸で育まれた規則性、幾何学性、対照性を造形の基本にした整形庭園とは異なっている。ラグビー邸をとりまく大庭園は、隣接する森をも併合する形で、まさに一つの巨大な風景式空間を作り上げていると言ってもよいと考えられるのである。

クリフォードにとって、森は所領としての、そして自然の風景の構成要素

としての意味が大きい。したがって、先に引用した彼の「古きイングランドを保存する」(傍点筆者)という言葉の中には、作者ロレンスが考える自然に対する人間のあり方、自然の中で、自然の一部として生きる、というロレンス本来の考えとの齟齬が表現されているのであり、有産階級の自分勝手な自然保存意識に対するロレンスの峻烈な批判が込められていることは明らかである。森は、本来、木々の繁みから発せられる独自のオーラが存在し、その生命力に感応するものだけが自分自身の生命力をも発散できる。妻のコニーは、グリーンマンを象徴する森番メラーズに出会うことによって、始めて森の生命力と自分の生命力が響きあう体験をするのであり、クリフォードとの生活がまやかしの生であることに気付くのである。ロレンスは、自然の様態を知り、それに即した生のありかたを表現しようとした作家であり、人為的な保全の手段はむしろ断罪しようとしたのである。

ファウルズの場合はどうであろうか。先述したように、彼は、直截的にいくつかのエッセイで、破壊されつつある自然環境に対する警鐘を表現し、環境保護運動についても言及してきた。しかし、小説作品において彼が試みたのは、まさにロレンスと同様に、自然の中に入り、それに感応することで得られる体験の意味を書くことであった。森、樹木、川、巨石、洞穴、峡谷、など自然の事物と、そこに残されている古代の遺跡や人々の祈りの跡に、登場人物の体験の必然性が重ね合わされる。小説『マゴット』(A Maggot, 1985)では、ある青年紳士に率いられてイングランド南西部の荒野を進んでいく人々の一団が、そこから続く森の中に入って行って、各人各様の体験と結末を迎える様子が描かれる。彼らが入っていく谷間の斜面には、黒々とした樹皮に覆われた木々の繁る森があり、滝壺の向こうに洞穴がある。森の中の洞穴詣の話は、かつてイギリス各地の森で、「コープ」と呼ばれた洞を築き、オークの木を森全体を神殿に見立てた古代ドルイドに対する関心を読み取ることで、相当わかりやすくなる。その中で、青年紳士は森に同化してしまったかのごとくに、姿を消し、娼婦は幻視の体験の後、故郷に戻って、深く宗教に帰依する。ストーリーはシュール・リアリズム的な、予想を超えた展開をするようにも考えられるが、ファウルズの狙いは、やはり、森=自然が人間に及ぼす深い感化力を表現することにあると言えよう。

一方、この森に至る道すがら、一行が通っていく土地は、「フランスやイ

タリアの様式化された庭園や南欧の古典的な景観のみを自然美と考えている時代には、まるで魅力のない」(15) 場所であり、「美を味わおうと気取るものにとっては、まるで不毛の土地」(15)、「エデンの園からの永遠の追放と転落を否応なく思い起こさせる挑戦的で荒々しい自然」(15) の場所と表現されている。一行は、これらの表現があてがわれた土地を、森に入る前に「通過儀礼」のごとく通過するのである。つまり、このことは、逆に、17世紀にイギリスやヨーロッパで盛んになった様式化された整形庭園や、18世紀に完成されたイギリスの伝統的な庭園文化である自然の借景を取り入れた風景庭園、さらにはピクチャレスク庭園の流行と、それを自然美と曲解する風潮に対して、ファウルズが批判的な目を向けていることを示している。

ロレンスとファウルズ、時代を異にするこの二人のイギリス人作家は、上に見てきたように、自然を表現する仕方においても、また、自然の力に感応する生こそが最も大切であるとする考えかたにおいても共通する。そして、自然の美は、整えられた様式の整形庭園や自然を模した自然風景庭園の中には決して存在しないという考え方においても、彼らは一致すると思われる。英国庭園の伝統にそむく一つの系譜が存在すると言うことができるだろう。

実際、ロレンスは、自ら、アメリカ合衆国南西部・ニューメキシコ州の山中で、未だ手付かずの自然を体感し、パン神の存在を感知した。そして、それを「アメリカのパン神」("Pan in America") というエッセイで文章にした。同じように、ファウルズは、自然の中で体感される何かを、「緑のカオス」と呼んで大切にした (*The Tree*, 57)。それでは、本当に自然の力を体感し、パン神の存在を感知することは、現代のわれわれにも可能なであろうか。自然の一部分である人間として、自然を知り、自然の力に感応することができるなら、今なお、われわれもパン神を感知することが不可能ではないだろう。キース・セイガーは、ロレンスの作品に存在するバイオセントリックな意識の中に現代のエコロジーとの共通点があることを指摘し、ロレンスのパン神論が現代人に対して持つ重要性を論じている。セイガーの次の言葉は、現代人にもパン神を感知する可能性があることを暗示するようで興味深い。

ロレンスは時代の終わりではなく、始まりに在ると言って良い。今わたしたちが「奥の深いエコロジー」と読んでいるものは、パン神を表わす最新の

ネーミングなのだから。(Sagar, 156)

注

- (1) オーウェルの「ヒキガエル考」は、第二次大戦の終わり近くに、ロンドンの都心の到る所で見出された春の兆しを、歓喜とユーモアを込めて著したエッセイである。Cf. 有為楠泉「都市の中の自然」、文学・環境学会編、『たのしく読めるネイチャーライティング』76-77.
- (2) B. N. Olshen は kathleen Basford の考えを紹介し、グリーンマンがキリスト教の象徴に組み入れられた後、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス様式、さらにもっと新しい建築様式においても、モチーフとして利用されたと述べている。Olshen, 100.

引用文献

- Carson, Rachel. *Silent Spring*. Boston: Houghton Mifflin, 1962.
- Fowles, John. "Swan Song of the European Wild." *Venture: The Traveler's World*, Oct. 1965.
- , "Weeds, Bugs, Americans." *Sports Illustrated* 21, Dec. 1970.
- , "The Blinded Eye." *Animals* 13, no.9, Jan. 1971.
- , *The Tree*. 1979. London: Vintage, 2000.
- , *A Maggot*. 1985. London & Basingstoke: Picador, 1991.
- Lawrence, D. H. *The White Peacock*. Ed. Andrew Robertson. 1911. Cambridge: Cambridge UP, 1983.
- , *The Rainbow*, Ed. Mark Kinkead-Weekes. 1915. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- , *Women in Love*, Ed. D. Farmer, L. Vasey & J. Worthen. 1920. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- , *Mr Noon*, Ed. Lindeth Vasey. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- , *Lady Chatterley's Lover*, Ed. Michael Squires. 1928. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- , "Whistling of Birds." *Phoenix: The Posthumous Papers of D.H. Lawrence*. Ed. Edward D. McDonald. 1936. New York: The Viking Press, 1972.
- , "Pan in America". *ibid*.
- Olshen, Barry N. "The Archetype of the Green Man in the Writing of John Fowles." *John Fowles and Nature: Fourteen Perspectives on Landscape*. Ed. James R. Aubrey. Cranbury, NJ: Associated University Presses, 1999.
- Orwell, George. "Some Thoughts on the Common Toad." *Shooting an Elephant and Other Essays*. London: Secker & Warburg, 1950.
- Sagar, Keith. "The Resurrection of Pan: Teaching Biocentric Consciousness and Deep Ecology in Lawrence's Poetry and Late Nonfiction." *Approaches to Teaching the*

Works of D. H. Lawrence. Ed. M. Elizabeth Sargent & Garry Watson. New York:
The Modern Language Association of America, 2001.

有為楠泉, 「都市の中の自然」『たのしく読めるネイチャーライティング』文学・環境学会
(ASLE-Japan) 編集、ミネルヴァ書房、2000.